

磨消縄文系突起

—中部高地縄文後期後半の諸相(1)—

百瀬 長秀

I はじめに	IV 磨消縄文系突起の転換
II 磨消縄文系突起の発生	V 関連する突起
III 磨消縄文系突起の変遷	VI おわりに

I はじめに

「羽状沈線文系土器群初源期の地域相」と題した小論（以下、「前稿」と呼ぶ。）で、おおむね加曽利B2式に並行すると思われる時期の中部高地の土器編年案を提示し、技術的な背景などに言及した〔百瀬2002予定〕。それから派生するテーマを幾つか見いだしたが、本稿の主題もその一つである。取り上げたいのは、加曽利B式3単位把手付磨消縄文深鉢の、把手と把手の中間に貼付される突起である。「磨消縄文系突起」と呼んでおく。

離山遺跡再報告〔百瀬1999〕で、「つ」の字文鉢^(註1)の単位文の変種として、一列の変化を見せる立体的な突起の存在を認めた。「つ」の字文鉢はこのタイプ以外には主体的な突起をもたない。その起源や末路は全く不明のままだったが、中村中平遺跡の中にそのヒントになる突起を見い出して、ようやく見通しが立てられるようになった。「つ」の字文鉢に使用される突起の祖形を「磨消縄文系突起」に求めよう、というのが本稿のもくろみである。

中村中平遺跡の類例は、いわばミッシングリングを埋めてくれるものの貧弱に過ぎ、それだけでは変遷の見通しを示すのは難しいので、中部高地の類例を総動員する必要がある、そのために紀要のページを借用することにした。前稿に準じた幾つかの述語の説明は、本稿では最低限に留めたので、説明不足で納得を得られない点が生じそうだが、前稿をご覧願うことで、お許し願いたい。

II 磨消縄文系突起の発生

(1) 磨消縄文系土器の編年観

加曽利B式の指標となるいわゆる3単位把手付磨消縄文深鉢には、把手と把手の中間に小さな突起が貼付される。安孫子昭二によって把手の変遷が明示され〔安孫子1971〕て以来、把手の方は注目度が高いのだが、突起はあまり注意されずにきた。中部高地ではその初源は羽状沈線文系土器群初源期にあると見られる。前稿では当該期の中部高地編年観を、古段階〔基準資料・八窪遺跡2号ブロック〕—中間段階〔基準資料・清水端遺跡〕—新段階〔基準資料・石神遺跡J1号住居〕に大別し、新段階はさらに細分できる可能性を残すと考えた。件の3単位把手付磨消縄文深鉢は、西関東では、小仙塚段階—東谷段階—平尾段階と変遷するとされる〔安孫子

1981]。両地域の様相はかなり近く、古段階は小仙塚段階に、新段階は東谷段階～平尾段階に、おおむね対応してくれそうだ。

羽状沈線文土器群初源期中部高地編年観と、離山遺跡の再報告で示した羽状沈線文土器や「つ」の字文鉢の編年案〔百瀬1999〕との関係は、中間段階～新段階が羽状沈線文第1～2段階にはほぼ対応し、新段階に後続するのが羽状沈線文第3段階・「つ」の字文鉢最古相だと考える。ただし、離山編年案は訂正すべき箇所が幾つもあり、別途訂正を準備中で、そのまま使用するには問題があるので、本稿に限っての暫定的な対応関係とする。本稿の主題である磨消縄文系突起は、この二つの編年観で示した時間幅の中で変遷する。

本論に入る前にもうひとつ説明しておかねばならないのは、件の深鉢の系譜は単一ではなくなることである。その口縁部は屈曲をもち、屈曲部以上は把手・突起以外の文様が入らないのが原則で、徹底してミガキが加えられて顕著な光沢をもつスペースであったのが、中間段階に至ってそこに上向き弧線文やそれに類似するモチーフが取り入れられるタイプが出現するのである。この口縁部文様帯はI文様帯なのだが〔山内1964〕、そこが伝統的な光沢スペースを踏襲するのを磨消縄文系深鉢A、モチーフの導入によってミガキの光沢と縄文の非光沢のコントラストをつけたのを磨消縄文系深鉢B、と区別する^(註2)の必要が生じた。本稿は以上の時期区分・器種細分を前提とし、関連する要素にも目を配りながら、視点を突起において、その変遷を追跡する。

(2) 祖形（古段階～中間段階） 〔図1〕

古段階～中間段階の磨消縄文系深鉢の類例を図1に集めた。古段階の口縁部文様帯の把手と把手の間には、細い縦隆帯のほか、えぐりによる点刻や点刻に絡み付くような細い弧状隆帯

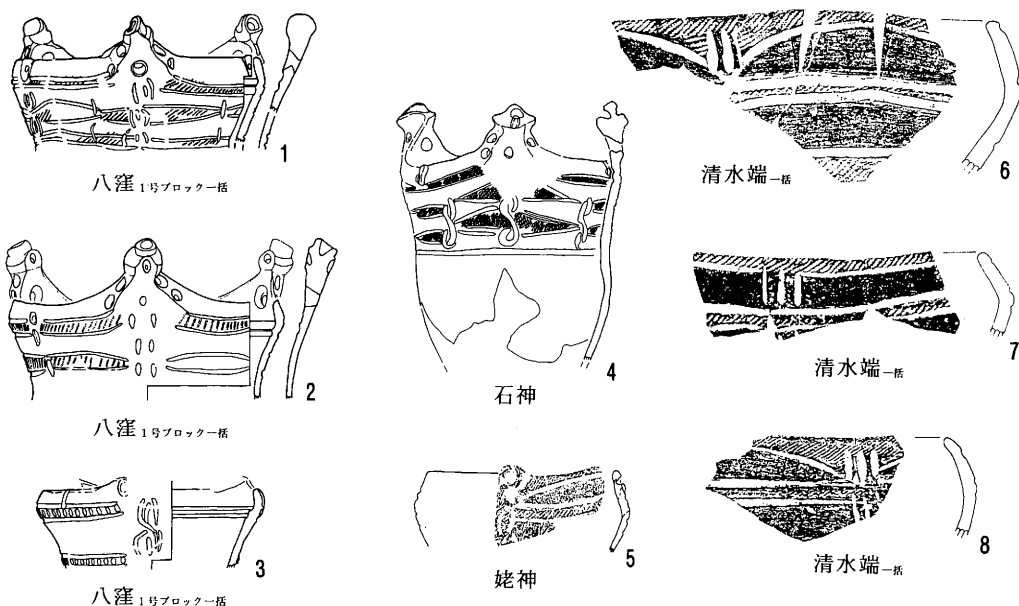


図1 磨消縄文系突起の祖形など

などが置かれるが、特に何も加えない例もある。これらの要素は加曽利B式では個別には珍しいものではなく、他の部位や他の器種にも使用されている。2の点刻は口縁屈曲部にかかって施されており、これが屈曲部より上に持ち上げられ、弧状隆帯が付加されて、1や4のような突起の祖形に進展したのかと憶測する。あるいは、いわゆるお玉じゃくし文が関わる可能性もあろう。この段階では隆帯は口端より上に出ているかどうか微妙で、突起という表現は正しくないくらいだ。

中間段階の突起は良好な類例がほとんどない。磨消縄文系深鉢Aの好例がないからだが、小片では古段階との相違は認めにくい。中間段階から登場する磨消縄文系深鉢Bの6～8には、突起が貼付されるべき場所には、上向き弧線文特有の単位文や、磨消縄文系深鉢主文様帯に由来する（|）状や対弧文を祖形とする単位文が描かれるが、これらは沈線表現である。上向き弧線文特有の単位文に制約されて、沈線表現の単位文が主体となったのだと推測する。貼付による突起は5くらいで、新段階にも見られる8の字状モチーフである。

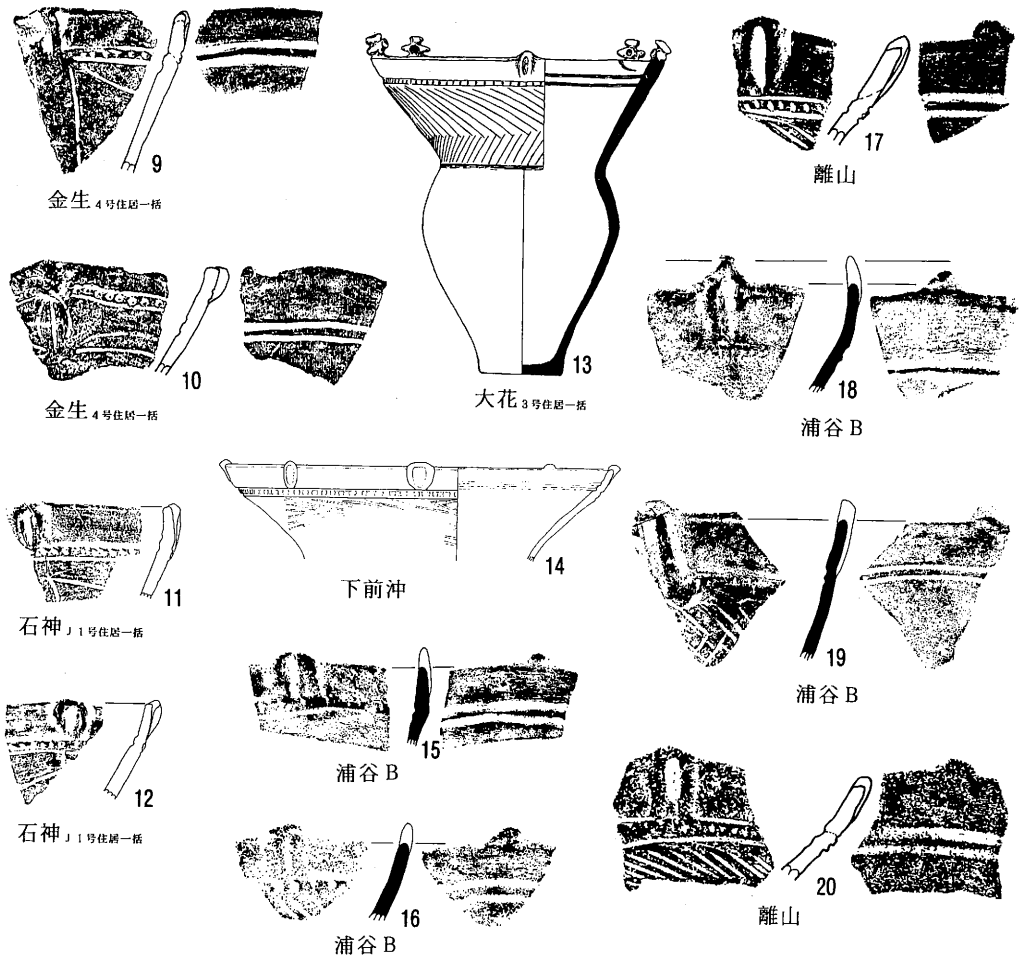


図2 磨消縄文系突起第1段階—その1

(3) 第1段階と把手(新段階) [図2~4]

石神遺跡J1号住居や金生遺跡4号住居を基準とする新段階の突起を図2・3に集めた。磨消縄文系深鉢Aの突起(図2)は縦長の直線化した隆帯で、口縁から上方に明瞭に突出し、幅が広がって大形化する傾向にあるが、厚みはないので立体的とは言えない。13に示される配置関係から見て、こうした突起が古段階~中間段階の突起祖形を継承していることは疑いがないだろう。その中央には縦位の凹部が形成されるのが特徴で、凹部の輪郭は押しなべてシャープではなく、突起下端から下方に突き抜ける傾向がある。これが最もポピュラーで類例が多い。独自の突起に成長したと見なされるので、この段階から「磨消縄文系突起」と呼称するが、以後の変遷を踏まえば、その第1段階だと考える。磨消縄文系突起はの成立は、新段階磨消縄文系深鉢の指標のひとつに挙げてよいだろう。新段階の磨消縄文系深鉢Aは口縁部の屈曲が退化し、ミガキが省略されるので粗大化の印象を免れないが、体部の屈曲はくっきり残る。これは磨消縄文系深鉢Bとの重要な相違点だ。若干存在する変種は省略するとして、注意しておかねばならないのは18・19だろう。この2点は突起が他よりも長く、口縁からの突出も比較的大きく、さらなる発達傾向を示すからで、より新しい傾向を見せると考えておく。

磨消縄文系深鉢B(図3)には中間段階と同様の沈線表現の単位文が使用されるが、21・22などのようにデザイン化が進むようだ。肝心の突起には2者がある。その一つは23で、剥落して詳細不明ながら磨消縄文系深鉢Aと同様の形態であることは間違いない。もう一つはまるで「8」の字をデザインしたような貼付文で、口縁から明瞭に突出するので突起と呼んでよいだろう。25を典型とするのだが、磨消縄文系深鉢Aの突起同様の縦長の隆帯上に、深めの丸い圧

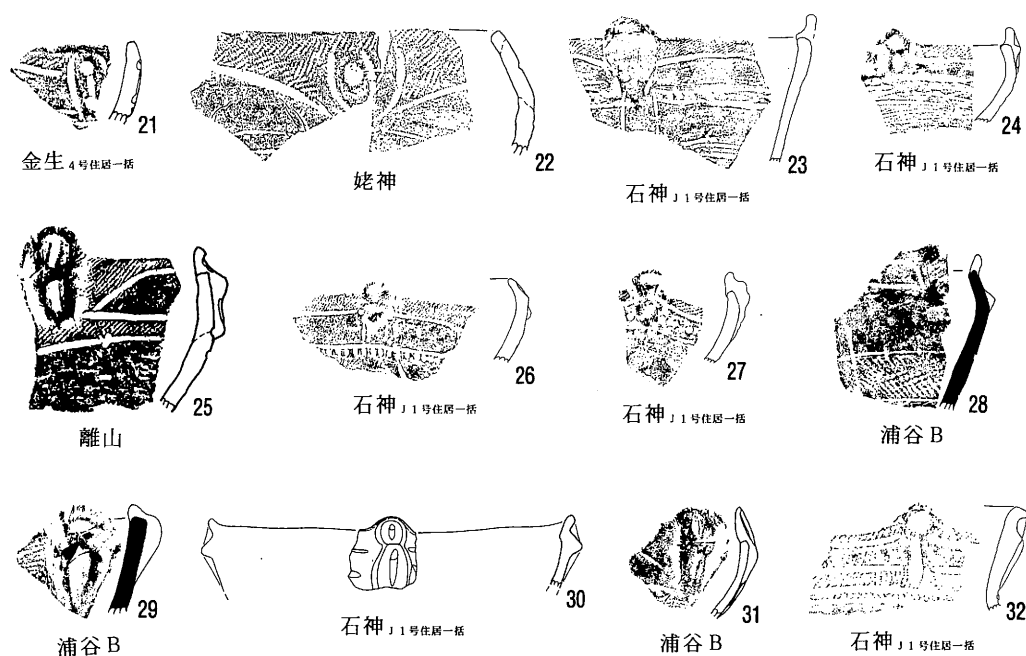


図3 磨消縄文系突起第1段階一その2

痕を2個縦列させる。付加的な要素は相違するが、ベースとなる貼付はほとんど相違がないと考え、これらも第1段階磨消縄文系突起の仲間だと考える。2個の丸瘤を縦列させた28も同趣の変種だと考える。磨消縄文系深鉢Bにもより新しい傾向を示す例がある。縦列する圧痕の下側が間延びして長くなる29～32がそれで、これは磨消縄文系深鉢Aの突起の様相を取り込んでいると思われる。両系譜の融合傾向を示すと考える。30は新段階の基準資料である石神遺跡J1号住居出土なので、その一括性を重視して、これらも第1段階の中に収めるが、第2段階の様相を先取りしている。磨消縄文系深鉢Bは口縁部・体部の屈曲の弛緩傾向が強く、器壁はやや厚く、ミガキも省略気味で、磨消縄文系深鉢Aに先んじて粗大化する傾向が見て取れる。

類例の多い新段階の把手の一部を図4に集めたが、完形品は13(図2)である。その把手は、棒状の軸を中心におき、それに鉢巻状の紐が巻き付けられ、内外面の点刻や頂部の窪みなどの加飾が見られる。中間段階以前の把手を説明して来なかったが、それらからのスムーズな変化であることは、安孫子昭二によって示されている[安孫子他1971]。

(4) 器種の再編と突起・把手の融合現象(新段階) [図5]

新段階の基準の一つである金生遺跡4号住居一括資料に属する37は、幾つかの点で注意を払う必要がある。37ははっきりと屈曲する口縁部に文様帯をもつ深鉢だ。口縁部横帯文は上向弧線文変形の直線的モチーフで、2条沈線で口縁部文様帯の上下端を画し、沈線の上下は狭い縄

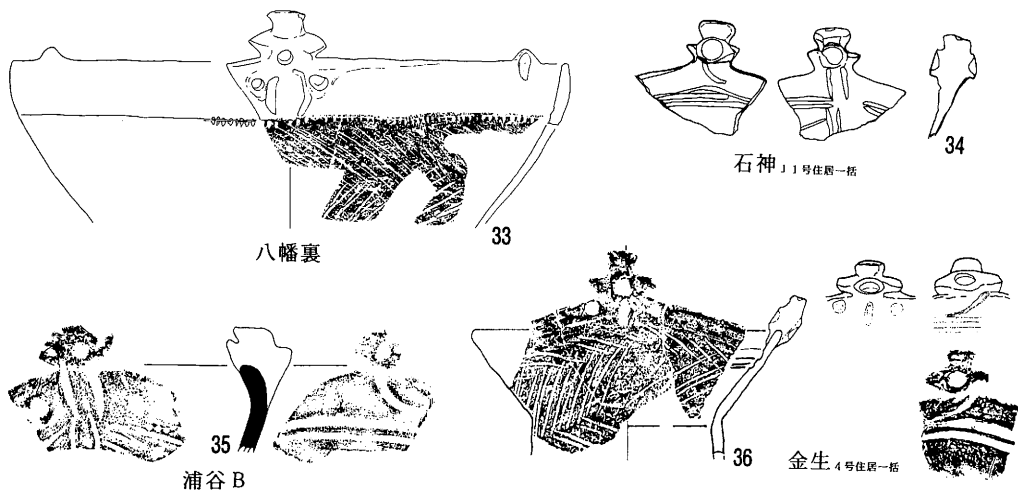


図4 中部高地新段階の把手

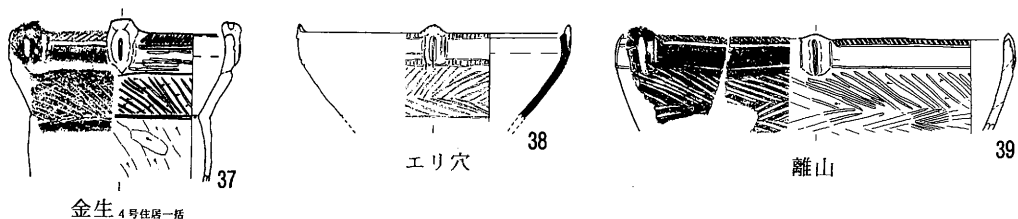


図5 磨消縄文系突起第1段階一その3

文帯、中央の幅広い空白にはミガキが顕著だ。磨消縄文系深鉢Bの系譜をほぼ正確に受け継いでいる。しかし、体屈曲がシャープで器壁も薄い。これはむしろ磨消縄文系深鉢Aとの共通項で、磨消縄文系深鉢Bの粗大化傾向とは相いれない。37は磨消縄文系深鉢A・B両者の系譜を折衷させているのではなかろうか。

37の単位文は縦長の突起で、その正面には縦長の凹部が作られるので、磨消縄文系深鉢Aの突起の様相を受け継ぐと言える。しかし、この突起は随分厚く、頂部には点刻が加えられており、この点では突起よりも把手の系譜を受け継ぐように思える。新段階の把手を図4に集め、それに後続しそうな把手を図6に集めたが、それらの把手は棒状の軸を中心においている。37の突起はその棒状の軸そのもので、加飾を失った様相は図6の末期的把手に近いように見受けられる。頂部の点刻は把手の装飾には一般的だし、厚みは把手ならば当然であろう。把手の末期的様相を取り込んだ突起、あるいは把手と折衷させた突起だと考えてみてはどうだろう。37は金生遺跡4号住居一括資料に帰属し、それは新段階の基準となると考えるので、図6に集めた仲間より先行するとせざるを得ない。少々問題ではあるが、突起だけが後続する様相を先取りした変化を示すのだと考えて新段階におき、磨消縄文系突起第1段階の変種だと考える。37の体部のケズリが顕著で、羽状沈線はアタリの浅い第3種であることも、新段階とする根拠になる。

38・39は器形や文様帯構成が37に一致するので同器種だと考える。単位文は一般的な磨消縄文系突起で、中央の縦長凹部に沈線を追加しているが、大きな相違はないと考えて第1段階に(註3)おく。

磨消縄文系深鉢Aから継承した口縁部・体部のくっきりとした屈曲、磨消縄文系深鉢Bから継承した口縁部文様帯横帯文、そして把手を取り入れた突起という組合せは、新器種の成立というより磨消縄文系深鉢の再整理と言った方が正しいかもしれない。磨消縄文系深鉢を再編成した37のような器種の体部は羽状沈線一色なので、もはや磨消縄文系深鉢の仲間を含めないほうがよいだろう。この器種を重視するのは、器形と文様帯構成が「つ」の字文をもつ深鉢と同一であるからで、その成立に関与しそうだ。

37～39は磨消縄文系突起を継承し展開させる器種だと推測され、「つ」の字文鉢の初源期には主要な深鉢として組成の中でも重要な位置を占めるとも推測されるが、実態はまだ未解明で系譜についても判断できない点が残る。37などに限らず、磨消縄文系譜を継承する器種の再編成の問題は複雑で、安易には解決できない課題が残されており、その検討は機会を改めることにしたい。(註4)

III 磨消縄文系突起の変遷

(1) 把手の末路（新段階後続相・「つ」の字文鉢離山最古相対応）、[図6]

II-(3)で新段階の把手を一瞥したが、それらに後続しそうな例を図6に集めた。その中で比較的装飾性に富むのは40で、棒状の軸の根元に1対の点刻が残され、正面に加えられる太い凹線は、34に見られる把手の装飾の簡略化だろう。41の内面の点刻は把手起源なら説明でき、外

面中央の縦長凹部は突起起源なら説明できる。37と同様、把手を取り込んだ突起の類例だと考える。しかし縦長凹部は随分幅広いので、37よりは新しいのではなからうか。40・41の体部の様相は不明だが、傾きからして体部屈曲は存在するだろう。口縁部の無文帯とともに、13を代表とする磨消縄文系深鉢Aの特徴をより正確に継承する。しかし、これらは13とは明らかな隔たりがあり、新段階に後続すると考えたい。磨消縄文系深鉢Aらしさを残すのはこの2点が最後であろう。

図6の把手の多くは棒状で、把手特有の装飾はほとんどなく、40・41からもさらに隔たりを見せる。把手系譜ではあるが、もはや突起と呼んでも差し支えないくらいだろう。46は棒状で無加飾だがあくまで厚く、把手の面影を辛うじて残す。かすかではあるが縦長凹部が形成される44は、突起の様相を取り入れており、45・47・48も同様である。50・51は波状縁深鉢にこうした把手を転用した例だろう。42は棒状の軸に太く低い鉢巻きを付加するが、中村中平遺跡にも類例がある。新段階の把手の特徴だった鉢巻状貼付の退化だろう。43は42と同一個体の可能性があり、体部屈曲が明瞭に示される。この2点は口縁部直下に1条の沈線を巡らし、口端との間のわずかなスペースに圧痕を付加する。これは波状縁深鉢によく見かける帯構成で、系譜の混乱を感じる。小形の土器だが器壁が厚く、37と異なって粗大化傾向があるといえよう。

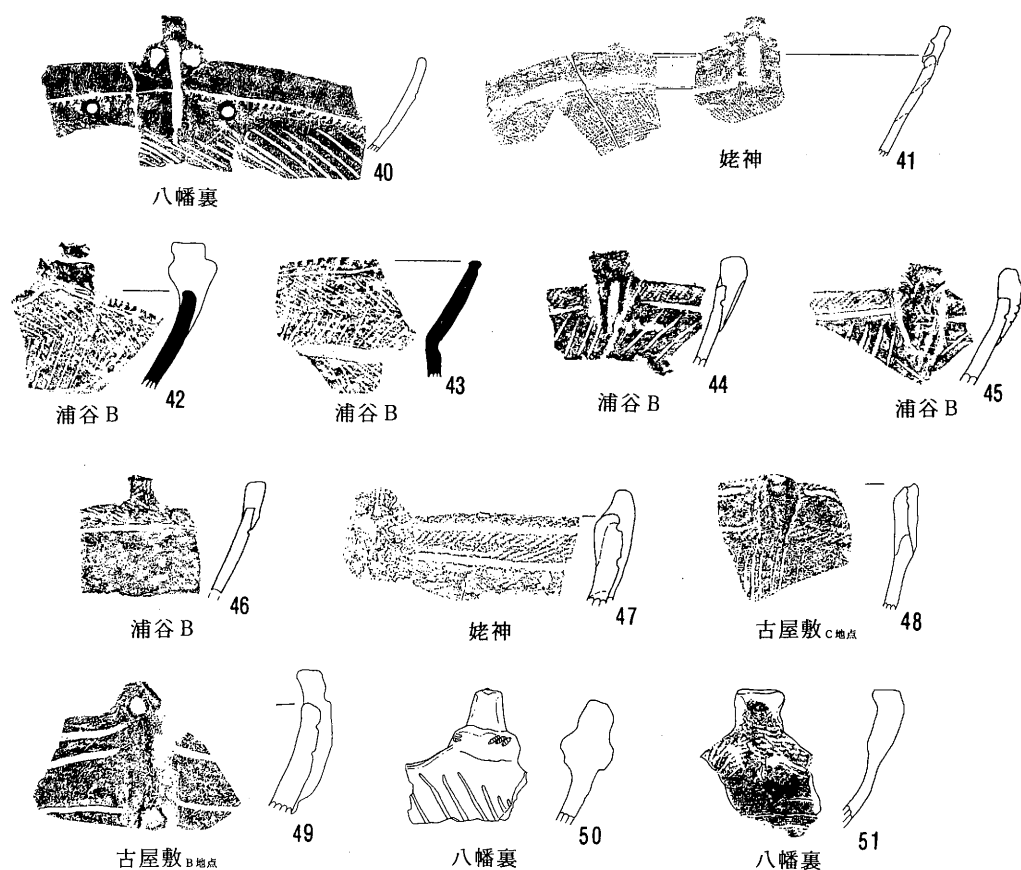


図6 中部高地新段階後続相の把手

これらの類例はいずれも口縁部の屈曲が失われ、器壁も厚く、粗大化傾向は否定できない。注意すべきなのはそれらの口縁部文様帯横帯文で、47・48は磨消縄文系深鉢Bの系譜を引くので除外するとして、その他は1条の沈線で下限を画した幅狭い縄文帯である。下限を段で画した幅狭い無文帯という磨消縄文系深鉢Aの構成を継承しつつ、個別の要素を置き換えてしまったと考えてよいのではなかろうか。磨消縄文系深鉢Aの系譜の直接的後継者ながら、様相をかなり改編した新たな器種だと考えて見てはどうだろう。それらの体部の様相は不明だが、異系譜要素を取り込んだ43はくっきりとした屈曲を残す。口縁部の屈曲を失いつつ、体部の屈曲は残す可能性があるのかもしれない。こうした構成の土器は山梨県側の八ヶ岳西南麓に類例があるが、その後どれほどの展開を見せるかどうかは不明である。

42以下の土器は粗大化傾向が明らかだが、それは磨消縄文系深鉢系譜全体に共通する様相である。変遷の末期においては精製土器から転落したと考えたい。それらの把手はむしろ突起と呼びたいくらいに変化し、新段階の把手からは明瞭に距離を置くので、それに後続する様相だと考える。把手の末路は突起に吸収されるかのようである。次節で述べる第2段階の突起との共通点が多く、同一段階だと推測する。

(2) 突起第2段階（「つ」の字文鉢離山最古相対応） [図7・8]

第1段階の磨消縄文系突起に後続し、把手との融合傾向を見せる突起を図7・8に集めた。それらは把手と共通の棒状の軸を貼付し、そこに第1段階では磨消縄文系深鉢Bに限定的であった「8」の字状構図を取り入れたと推測される。その「8」の字状構図の下側が下方に延長する29～32を、第1段階でもより新相と考えたが、その延長がさらに拡大した構図だと思えばよいだろう。点刻と縦長凹線の組み合わせを、棒状の軸の正面に描いたといえる。磨消縄文系深鉢Aを中心に使用された、縦長凹部をもつ突起を基本にして説明するなら、縦長凹部の幅がさらに拡大するとともに、突起の上位に太く丸い点刻が加えられる、と理解することもできる。いずれにしても、第1段階に存在した2種の突起を融合させたかのように見受けられる突起である。縦沈線と点刻の組み合わせは上向弧線文に伴う単位文としてはポピュラーで、ソロバン玉鉢や磨消縄文系深鉢Bの単位文と共通のデザインであるが、磨消縄文系突起では点刻を上にくくのがノーマルなので、配置は逆転している。また、点刻はえぐりによって施されるのかもしれないが、なぞり直すので輪郭は甘く、縦線は一般的な沈線ではなく、指(?)でなぞった太い凹線である。^(註5) 一塊の粘土から作られて突起としては一体だが、点刻部分は斜め上方を向き、縦長凹部部分は正面を向くのが、断面形からも推測できる。突起の最大厚は点刻部分と縦長凹部部分の接点にあることが多く、そうでなければ点刻部分の方が厚い。突起上には縄文が加わるのも新たに重要な事態だ。本来光沢部位だったのが、それを完全に否定することになったからだ。一方、突起内面に加わる点刻は、把手に由来する伝統的な装飾の変形だろう。

こうした突起は主として4種類の器種に使用される。第1は64のような磨消縄文系深鉢B系譜の横帯文をもつ仲間である。第2は58のような前節で示した磨消縄文系深鉢A系譜の横帯文をもつ深鉢で、第1とともに粗大化傾向を見せる。59・60などのように沈線が2条に増加する例は、口縁部文様帯の上下を画して中央に広い空白を取る磨消縄文系深鉢Bの横帯文とは構成

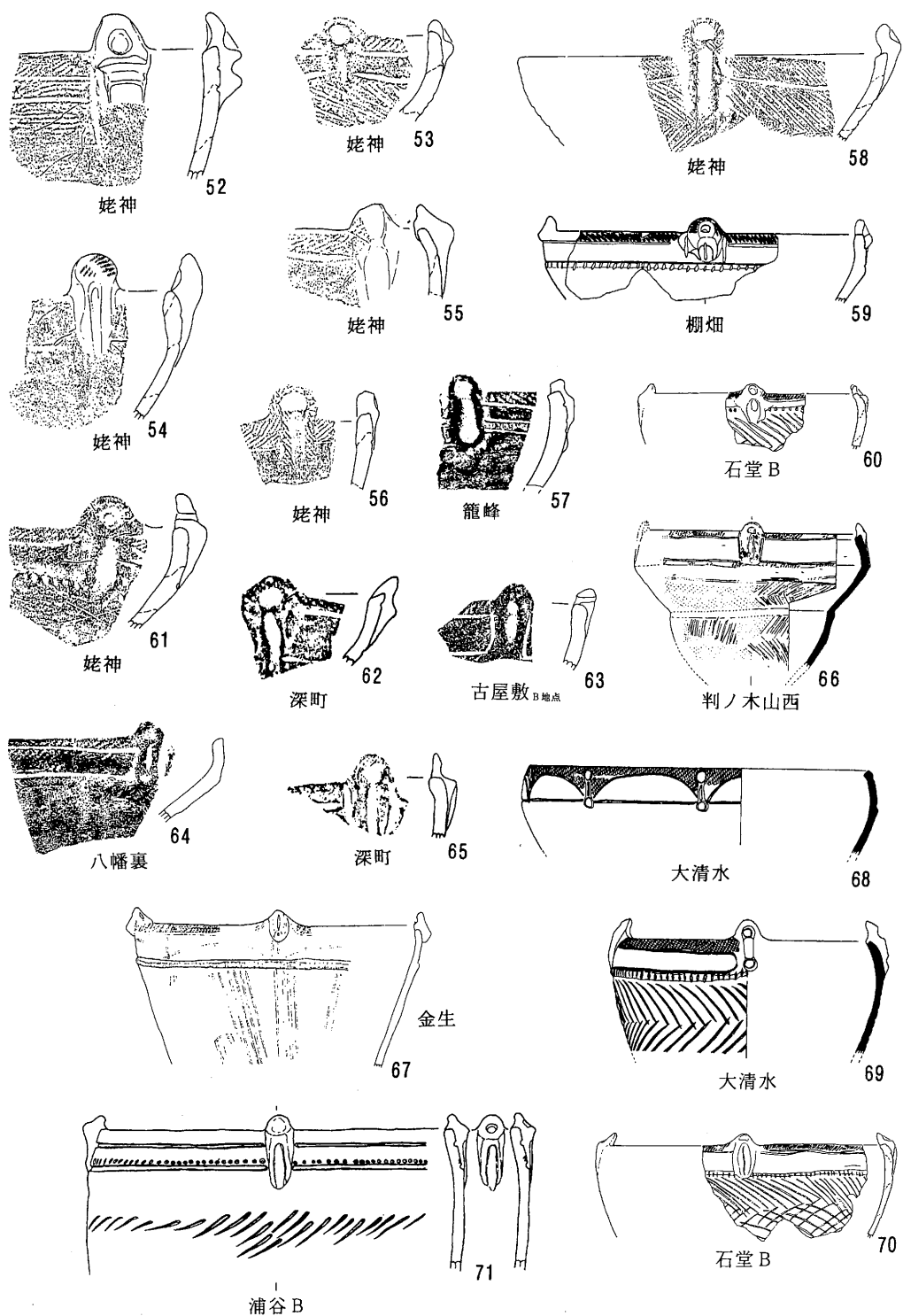


図 7 磨消縄文系突起第 2 段階一その 1

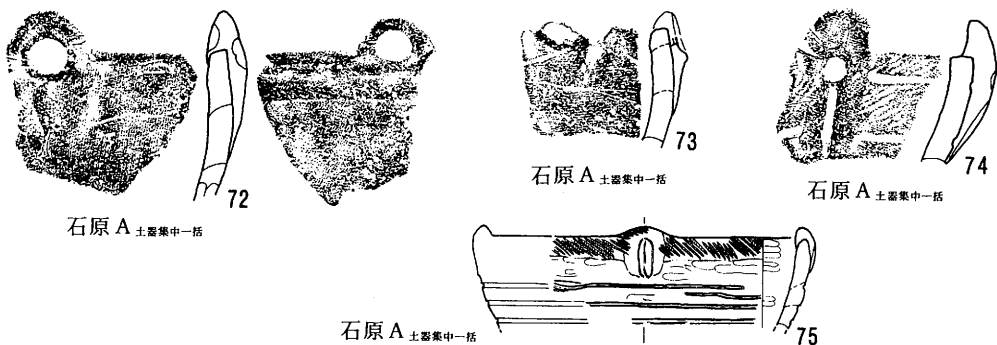


図8 磨消縄文系突起第2段階—その2

が異なるので、58の仲間だと考える。併用される羽状沈線は太く深い第3種である。

第3は66で、37～39と同一器種である。口縁部・体部とも屈曲はシャープ、体屈曲部にはミガキが顕著で、粗大な印象からは遠い。羽状沈線は密度が濃くケズリも顕著なので、第3種というより第2種にしたいくらいだ。横帯文は長方形の箱形モチーフで描線は細く浅い。突起は38・39の形態を継承し、縦長凹部の上位に点刻が加わり、縦長凹部の中央には沈線が追加されて凹部が強調され、突起の上にまで縄文が及ぶ。突起はさほど厚みがないので37を経由せずとも新段階の突起からつなげることもできそうなのだが、断面形で見ると突起の点刻部分は斜め上方を向き、縦長凹部は正面を向いて、58などと同様に向きが二分される。その様相は59で一層進展し、点刻部分が独立して厚みのある突起となり、縦長凹部は厚みを減じて衰退気味となってしまう。

第4は湾曲する口縁部と屈曲を失った体部を特徴とする深鉢で、楕円文深鉢と呼称したタイプである〔百瀬1996〕。70の単位文は標準的だが、69は突起上の縦長凹部の上下に丸い点刻を加える。点刻の輪郭はえぐった後になぞられているようで、手法としては凹線と同一である。69のモチーフは68とかかわるだろう。器形と文様帯構成が同一なので、この両者は同一器種だと判断するが、68には突起がなく、縦沈線を先に引き、上下の点刻はなぞって窪めている。上向き弧線文の単位文の一種としてはさほど違和感はないが、点刻と縦沈線との組み合わせ方は少々異相である。楕円文深鉢は磨消縄文系深鉢Bの直接的な後継器種の可能性があるが、詳細は別途検討する。

縦長凹線と点刻を組み合わせて加飾した突起は、それ以外の器種にも見受けられる。砲弾形深鉢としか言いようがない71の突起は、58とほぼ同一と言ってよい。粗大化した磨消縄文系深鉢Bとしか言いようのない67は、縦長沈線の下に点刻を配置するが、突起の上位と下位とで向きがはっきりと異なっている。

以上、多少の変種を含みつつも、点刻と縦長凹線を付加し、上下で向きを若干変えた突起、という共通項でくくることのできる突起が、複数の器種にまたがって使用されるのが確認できた。この突起が新段階に属する磨消縄文系突起第1段階の後継者であることは確信がもてる。磨消縄文系突起第2段階と考えたい。前節で検討した42以下の末期的な把手は、その形態が酷

似するので、磨消縄文系突起第2段階と併存するのは確実だろう。山梨県史ではこうした突起をもつ土器を加曽利B3式並行期においた〔三田村美彦1999〕が、妥当な扱いであろう。

第2段階磨消縄文系突起には、石原A遺跡〔佐藤信之1990〕の一括資料が存在する(図8)。72~75の4点が含まれる廃棄場出土一括資料は、羽状沈線文系土器を主体とし、若干加わる磨消縄文系器種は明瞭な新段階後続様相を示す。そのまとまりの中には初源期の「つ」の字文鉢が一定量加わるが、離山編年の「つ」の字文鉢最古相そのものと言ってよい。時間幅の極めて狭いまとまりで、第2段階磨消縄文系突起の時間的位置付けを裏付けるが、その資料報告を投稿中である。

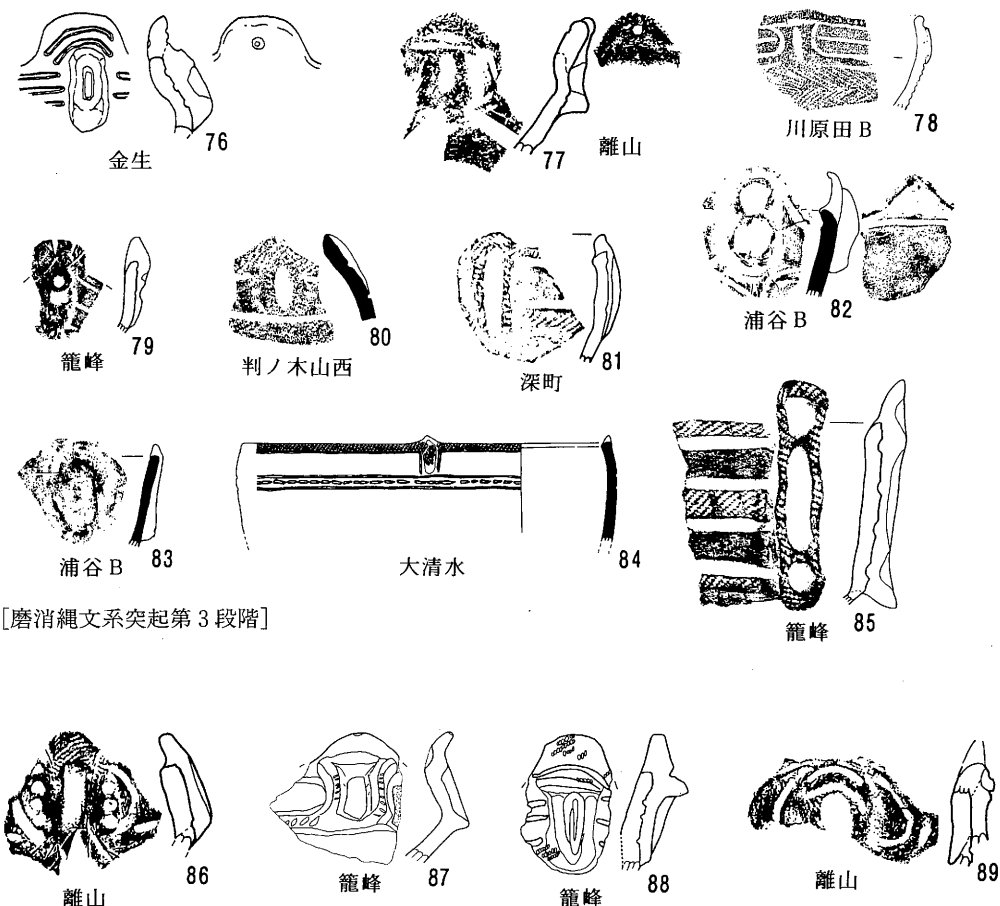
(3) 突起第3段階(「つ」の字文鉢離山第2相対応) 〔図9〕

第3段階と考える突起は類例が少なく、破片も小さくて突起部分の様子しかわからない。「つ」の字文鉢へ転用される第4段階の突起への転換点にあたるのだが、土器本体から切り離された突起を位置付けようというのだから、少々無理をしておける設定である。

その数少ない類例として、76~78・107・108があげられる。突起中央の特徴的な縦長凹部を見れば、これらが磨消縄文系突起の系譜を受け継いでいることが理解できるだろう。では第2段階との相違は何か。最も重要な相違点は、これらの突起は口縁から上方に突出する板状突出部位と、それにかぶさって貼付される瘤部位との合成品であることだ。板状突出部位の突出方向は器体の傾きに一致した自然な方向ではなく、76や108に典型的に示されるように、器体より斜め前方に突出する。板状突出部位は土器の器壁と同程度の厚みだが、瘤部位の厚さはその2倍以上もある。最初から二塊の粘土に分けて作られなければ、こうした形態は作れないだろう。第2段階以前の磨消縄文系突起は、貼付された一塊の粘土から形成されたと考えるが、第2段階の突起において、点刻部位と縦長凹部部位とが少々向きを異にすることを強調したのは、それが契機となって突起が分割製作される事態が発生したのではなかろうか、と推測したからである。

縦長凹部は厚みを増したぶんだけ深く、幅も広げるが、その下端が瘤部分より下方に抜けることはなく、瘤の中に収まる。ちょうど瘤部位の中央が深く窪められたことになる。瘤部位の上位側の裾に1~2条の沈線を描く例があるが、これも新たな事態だ。板状突出部位内面側には点刻1個が配置されることもあるが、これは磨消縄文系把手の装飾の系譜ではなかろうか。109・110も第3段階におくが、その理由は突起が分割成形される上、その上端が斜め前方に突出するからだ。縦長凹部を省略し、それ以外の装飾も加えないが、ミガキが卓越するので装飾性に乏しい訳ではない。以上が次の段階への変化を内包する主流派の突起だと考える。

籠峰遺跡出土の79は分割成形されるが、瘤部位は貧弱で装飾も不明瞭だ。85は異常に縦長で分厚い突起を貼付するが、前段階の69と同様の、上下に点刻を配した縦凹線をデザイン化した装飾が加わる。分割成形ではないが、69からはかなり変形しており、より新相だと考える。屈曲する口縁部文様帯も異常なまでに幅広く、直線的にこの突起にぶつけられる横帯文は、1帯おきに縄文とミガキが充填される。横帯文の様相も今一つ不明確で、積極的な根拠に乏しいが第3段階におく。79・85とも口端から突出する部位の平面形は角張っているが、籠峰遺跡では



[磨消縄文系突起第3段階]

[磨消縄文系突起第4段階]

図9 磨消縄文系突起第3段階～磨消縄文系突起第4段階

第4段階にこの様相が引き継がれる。小地域的な特徴なのかもしれない。

81の突起は上位の点刻部位が省略され、下位の縦長凹部部位がやたらと伸長して全面に縄文が加えられるが、断面形からして分割成形されたと判断した。80は断面図では明示されないが、口縁と同厚の突出部位とは別に瘤部位を貼付しており、82・83も同様に、これらも分割成形である。83の瘤部位は点刻を失う代わりに縦長凹部が異常に広げられ、82も2個の点刻が異常に広げられる。外見は異なるが製作技法などに共通点が認められるので、これらも第3段階におきたい突起だ。84は同一器種の69・70より古相だとは考えられず、全面縄文の突起が矮小化したと考えてここにおいたが、積極的な根拠は乏しい。

分割成形を基準とし、第2段階からはみ出す要素を含めて、磨消縄文系突起第3段階を設定した。量は少なく、少数派であることは間違いない。その中で重要な意味をもつのは、後続する第4段階の突起を生み出す76・77・107・108や、その信越国境ヴァージョンを生み出す79・85であろう。既述のとおり、第3段階の突起は破片が小さく、横帯文との組み合わせが不明で、

取り付けられる器種も確定できない。108は「つ」の字文鉢に付く可能性があり、そのほか37で示した新たな器種を中心にして、楕円文深鉢や口縁部が無文帯となる鉢などに貼付されるのだろうが、憶測でしかない。良好な資料を待たざるを得ない。

磨消縄文系突起第2段階が離山編年最古相に対応することは既に示したが、次章で述べる第4段階の突起は離山編年の第3相に対応すると考える。ゆえに、両者の中間にある第3段階は離山編年第2相に対応することが期待できる。

Ⅳ 磨消縄文系突起の転換

(1) 突起第4段階（「つ」の字文鉢離山第3相對応） [図9]

86~89・105・111の6点しか類例がなく、前段階よりもさらに貧弱だが、重要な転換点を示すことが期待される突起である。86でははっきりわからないが、89・105は前段階を踏襲して板状突出部位と瘤部位が分割成形される。瘤部位には中央の縦長凹部が踏襲される。縦長凹部の浅い86では不鮮明だが、深い87~89・105では瘤部位は左右に二分割されてしまう。突出部位から瘤部位にかけて付加される縄文とともに、前段階81などの様相を取り入れるのだろうか。111に至っては縦長凹部の底は器壁そのものとなっており、粘土紐を方形に巡らして貼付して作出したとしか考えられない。

瘤部位にさまざまな装飾が加わるのも前段階との相違点だ。88・89・105の瘤部位の上部中央には細い隆帯が貼付され、その隆帯の裾に沈線が付加される。細隆帯は111の瘤部位の上下にも貼付されるが、その細隆帯上には1条の沈線や縄文が付加される。瘤の上を眉状に強化したようだが、前段階の76や108の瘤部位上位側の裾沈線を継承するのではなかろうか。88・111を除き、いずれも突起の左右は弧沈線で囲まれるが、これは新しい要素だ。86の瘤部位左右には円管状工具の刺突が加わるが、これは砲弾形深鉢の単位文に付加される装飾と一致し、両者の対応を示す鍵になってくれるだろう。105の板状突出部位には口縁に沿うように「ハ」の字状の沈線が追加されるが、前段階77の裾沈線の変形かもしれない。板状突出部位内面の点刻は、把手に対する息の長い装飾の継承^(註6)だろう。

以上、6点は突起第3段階を継承し、その要素をより装飾的に改変し、新たな装飾も加えて成立した、新たな突起だと考える。とりわけ重視したいのは、縦長凹部の拡大に伴う瘤部位の分割と、そこに追加される隆帯で、瘤部位自体が分割成形に移行したことである。縦長凹部がまだ本来の形態の面影を残しつつも、瘤部位分割成形の開始と装飾の繁雑化によって、縦長凹部の分解が始まっており、突起の変遷は、新たな段階へ突入した。

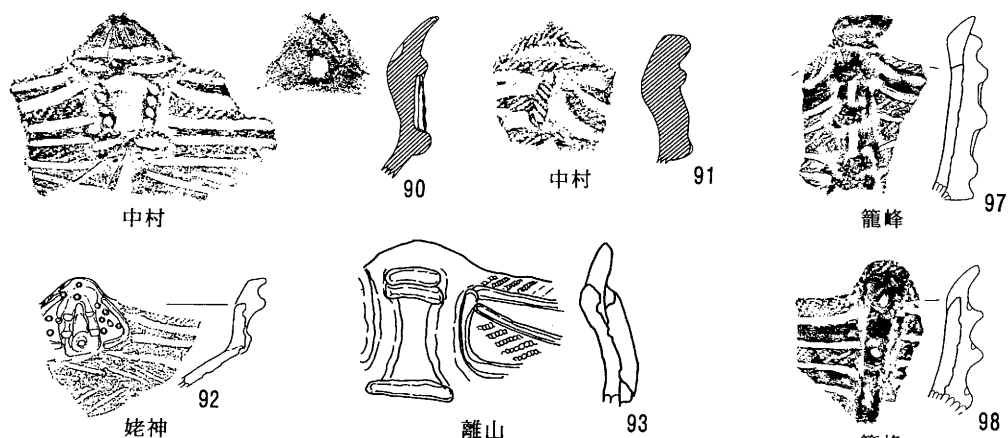
さて、唯一横帯文が判明する105に注目しよう。横帯文は4条の弧線で、縄文とミガキのコントラストが顕著である。弧線のカーブの様子から見れば、中央に単位文を挟んで、12単位程度の短いピッチで描かれる。こうした在り方は離山編年「つ」の字文鉢3相の特徴そのものである。「つ」の字文鉢3相は「つ」の字文が分解しきってしまい、その制約から解放されて、新たな単位文が模索される段階である。実際に多様な単位文が試行されるが、その一つとして磨消縄文系突起が採用されたのだろう。磨消縄文系土器群に起源する突起は、瘤部位が分割成

形に移行した時点で、「つ」の字文鉢に取り込まれたのだと判断する。

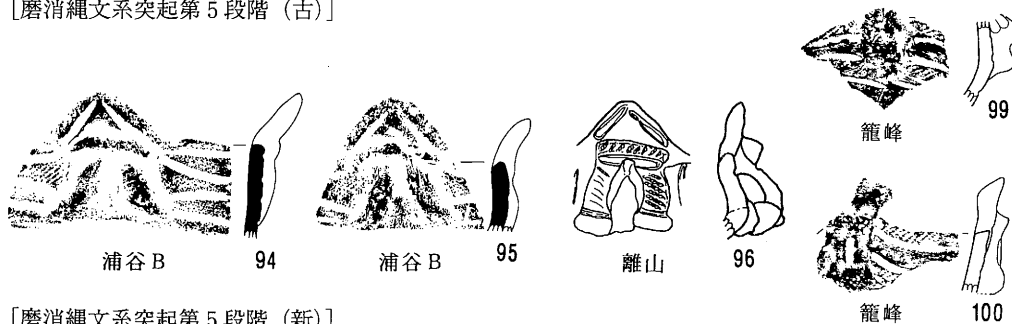
(2) 突起第5段階（「つ」の字文鉢離山第3相対応） [図10]

まずは90～93・112・113である。6点とも板状突出部位は前方に屈曲して突出する。瘤部位は4条の隆帯に分割され、それらが取り囲む形で作出されるが、縦位の隆帯は弧線化してしまうので、縦長凹部の姿からはもはや遠い。隆帯上には縄文や圧痕が付加される。縦長凹部の解体と、その個別要素を引き継いだ新たな単位文の成立と考え、突起第5段階を設定する。

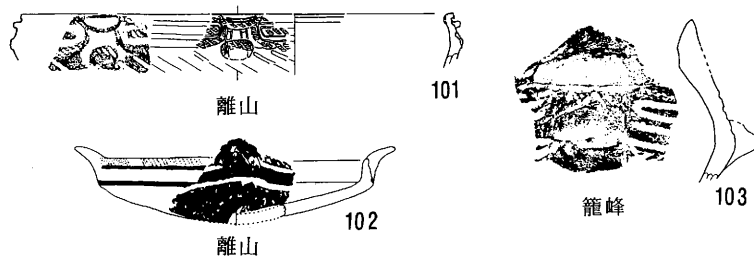
次は新たな単位文が展開した94～96・114・115である。下側の隆帯が省略されて縦弧線は



[磨消縄文系突起第5段階（古）]



[磨消縄文系突起第5段階（新）]



[磨消縄文系突起第6段階]

図10 磨消縄文系突起第5段階～第6段階

「ハ」の字状に開き、縦長凹部の形態は完全に失われる。突起第5段階でもより新しい様相だと考える。

最後に信越国境の箆峰遺跡出土の97～100で、79・85の後継者だと推測する。4点とも口縁部の屈曲が確認でき、幅広い文様帯をもつが、97・98は85と同様に異常に広い。横帯文は判然としないが、97・100は単位文たる突起に接する末端は弧線気味で、直線的な98・99を含めて、縄文とミガキが交互に充填されるので、「つ」の字文鉢特有の横帯文の仲間になりそうだ。その突起だが、上方～斜め前方に突出する板状突出部位と極端に縦長の瘤部位が分割成形され、瘤部位の上下端には厚めの横隆帯が貼付される。ここまでは突起第4段階の要素の継承である。瘤部位には横隆帯が幾つも追加され、そこには鋭い針状工具の刺突が加えられる。独自の装飾だが、突起に過剰な装飾を加えるのは第5段階の共通項だと判断する。瘤部位横隆帯の間には縦沈線が付加されるが、これは縦長凹部の継承だろう。97・98・100は赤色塗彩され、塗彩比率が高いが、それは離山編年「つ」の字文鉢2～3相めと共通の特徴である。99の体部には細めの羽状沈線が間隔を開けて施される。上段と下段の間隔が開くようだが、様相は不明とせざるを得ない。これらが79・85の後継者であることは確実で、突起の長大化は信越国境の地域的特色だろう。中村中平117もその影響下にある突起だろう。長野側の突起との対応は厳密にはできないが、その第5段階の範疇には間違いなく含まれるだろう。

92や93の横帯文の様相は第4段階の105と同様なので、突起第5段階も、離山編年「つ」の字文鉢3相めの範疇に対応すると考える。離山編年ではその3相めが新旧2分できる可能性ありと考えたが、それに対応してくれるかどうかは定かではない。

(3) 突起第6段階以降（「つ」の字文鉢離山第4～5相對應） [図10]

101～103が該当するほか、106など中村中平遺跡には若干類例がある。最も良好なのは101で、板状突出部位が欠落するが、「ハ」の字状の弧状隆帯とその上をつなぐ隆帯は、前段階94・95のデザインをそのまま引き継ぐ。新たに付け加わるのは、弧状隆帯の中間に貼付される丸瘤で、離山編年「つ」の字文鉢4相めを特徴づける単位文の転用である。106は口端の板状突起と横長丸瘤の組合せで、102は板状突起のみだが皿状で口縁部文様帯幅が狭いという制約の為に瘤が省略されたのだろう。

突起第6段階が、離山編年「つ」の字文鉢4相めに対応するのは確実であるが、本来4相めの土器は出土量が多いのにもかかわらず、突起第6段階は良好な資料に恵まれない。

第6段階の突起の後継者は、まだ1点しか発見できていない。118がそれで、斜め前方に突出する板状突出部位が独立し、口縁屈曲部には圧痕が加わった横長瘤が貼付される。「つ」の字文鉢の仲間で、口縁端部と屈曲部に斜圧痕が加えられるが少々デザイン化が進んでおり、離山編年「つ」の字文鉢5相め以降であるとしても、106などに直結するとは言い切れない。

図12に示した最古の隆帯文土器は、離山編年「つ」の字文鉢に照らせば6相めと言う位置付けになる。単位文として多用される突起の中には、磨消縄文系突起の近似例が含まれている。123などは106や118の板状突起と横長丸瘤の中間に瘤を付加すれば成立しそうだ。しかしそうした変化を示してくれる資料にはまだ恵まれておらず、憶測に基づく意見でしかない。せつか

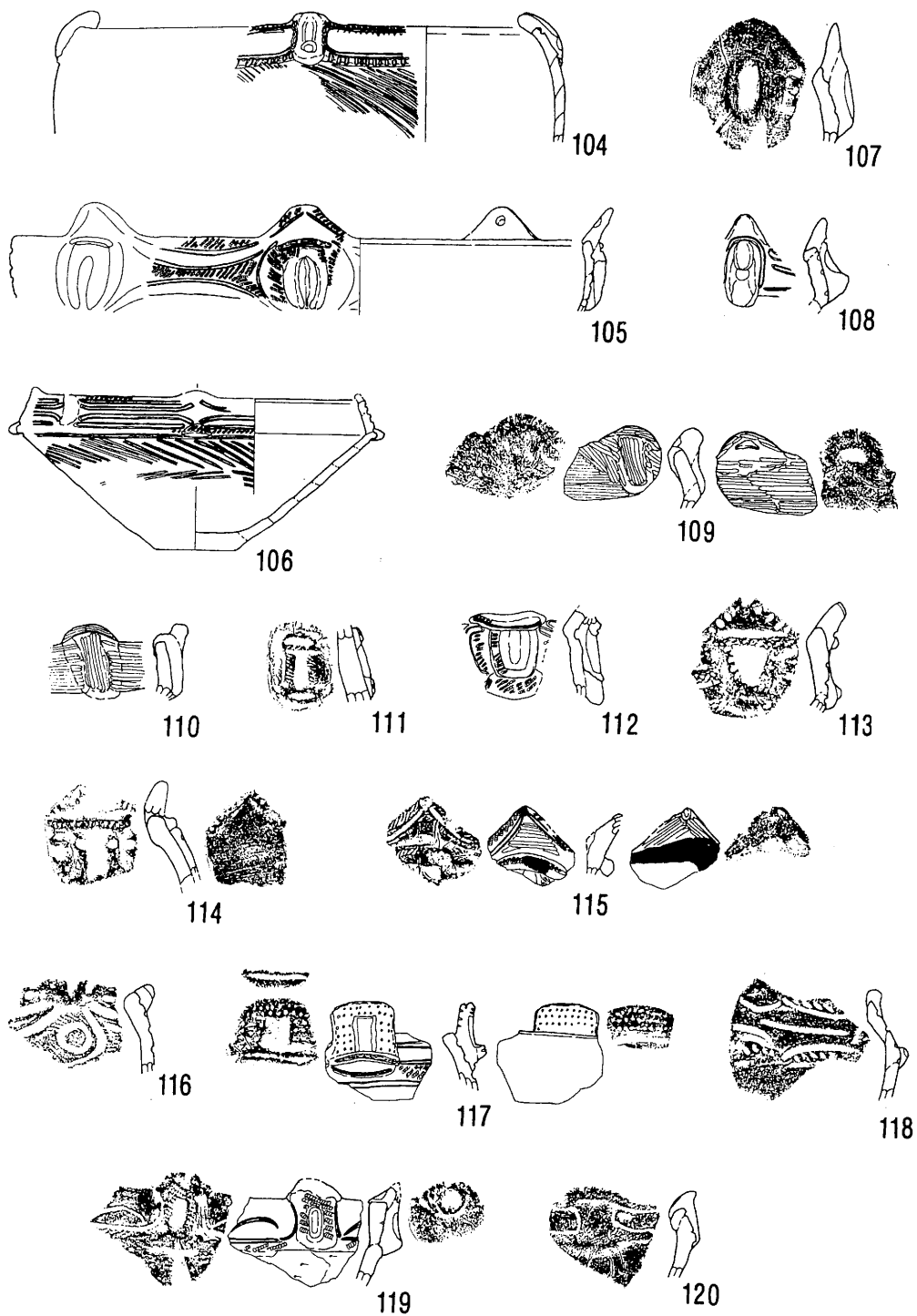


図11 中村中平遺跡の磨消縄文系突起

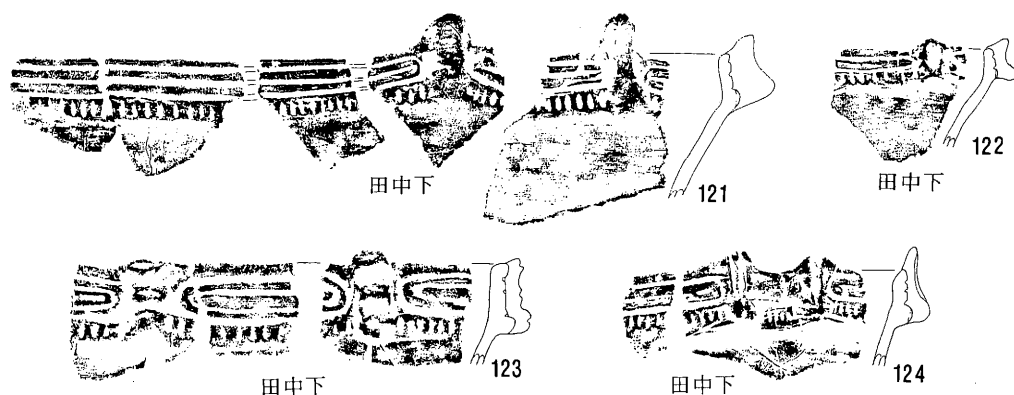


図12 隆帯文土器の突起

く息長い変遷が追跡できた磨消縄文系突起だが、突起の全盛期である隆帯文土器にその系譜が継承されるかどうかはいまだ不明である。隆帯文土器は羽状沈線文土器に大幅なモデルチェンジを加えて成立したが、個々の要素の多くは羽状沈線文土器から引き継いでいるので、突起にもその可能性がある。そうした期待を示して、突起変遷の追跡をひとまず終える。

V 関連する突起

119の突起は分割成形で、瘤部位の形態は中央の縦長凹部が広く、第3段階の磨消縄文系突起に共通する。縄文が加えられるのは同段階の80・81に例があり、第2段階から継承した要素だろう。板状突出部位内面には点刻が加えられる。119で問題となるのは横帯文だ。弧線に目が行きがちだが、口縁部文様帯下限の沈線の動きに注目してほしい。それは突起に沿って上昇し、口端直下で途切れてしまい、口縁部上限を画する横沈線は存在しない。口縁屈曲部と併走する沈線は、単位文である突起の裾に従って口端に収束する、と言い換えることができる。直線化した磨消縄文系深鉢Bのモチーフは、口縁部上限にも横線が巡り、口端との間には縄文が施されたはずなので、その系譜のモチーフではない。

屈曲する口縁部文様帯^(註7)の下限に巡らせた沈線を、突起に沿って口端まで延長させるのは、平縁・波状縁を問わず、蜆塚K2式の特徴である。蜆塚K2式の口縁屈曲部と沈線との間の狭い横帯には、擬似縄文・縄文・圧痕列などが充填され、沈線と口端の間の広いスペースはミガキで光沢を加える。単位文は突起が唯一で、突起上は無文か縄文が充填されるが、それ以外の外面装飾はあまりないようだ。問題は突起の内面で、特別な装飾がない場合もあるが、頂部を肥大させて点刻を加える例はかなり多い。体部は無文か条痕で仕上げ、全体に適度な光沢がある。

119は胎土や成形技法が当地域の標準的な羽状沈線文土器とは異なっており、体部無文の文様帯構成をとり、その装飾の基本を含めて、蜆塚K2式の系譜だと理解する。蜆塚K2式にとってノーマルではない横帯文の弧線は上向き弧線文の影響、突起中央の縦長凹部は磨消縄文系突起（正確には把手）からの転用だろう。ユビ圧痕による突起内面の点刻は、磨消縄文系突起の系譜でも、蜆塚K2式の系譜でも説明できるが、より積極的に両系譜が交流関係にあること

の証拠だと理解したい。119は蜆塚K 2 式をベースにして、上向き弧線文や磨消縄文系突起の要素を取り込んだ土器ではあるまいか。120も蜆塚K 2 式を基本にしていると考え。長方形モチーフの横帯文は元住吉山 1 式に標準的な要素だが、突起単位文深鉢や楕円文深鉢の横帯文の転用だとしても違和感がない。中村中平遺跡には搬入品と目される胎土・整形の異なる個体を含めて、蜆塚K 2 式にかかわる土器が多数見受けられる。それらの中には119・120のように中部高地独自型式の構成要素の一員たる、磨消縄文系突起をもつ器種との折衷個体が見られる。「つ」の字文鉢を除いた磨消縄文系突起をもつ器種の一部には、蜆塚K 2 式と器形や文様帯構成が共通し、横帯文にも近い様相が認められるグループがあり、それらこそ37のような器種ではなかろうか。そうした背景の下で、第3段階磨消縄文系突起は蜆塚K 2 式の突起との共通項をもつと推測する。蜆塚K 2 式と37のような器種は、相互に影響を与えあっているのだろう。

蜆塚K 2 式は元住吉山 I 式との並行関係が想定されており、加曾利B3式との並行も期待される。磨消縄文系突起第3段階は、「つ」の字文鉢の変遷の中で離山編年最古相～第2相の間に対応すると考えるが、それは加曾利B3式前半と並行することを期待してよさそうだ。時間的にも十分整合すると考えてよい。

VI おわりに

磨消縄文系突起の検討の成果は四つある。

第一は突起自体の息長い変遷が確認でき、地域的な伝統要素をまた一つ追加できたことだ。隆帯文土器の主要な単位文たる突起の起源に決着をつけるには至らなかったが、そうした期待は十分にもてるように思われる。

第二は編年観の構築に一定の寄与をしてくれたことだ。特に一括資料に欠ける羽状沈線文系土器群初源期新段階後続期は、「つ」の字文鉢以外は様相不明のままであったが、磨消縄文系突起第2段階～第3段階が該当し、磨消縄文系突起をもつ器種の編年上の位置が推測できることになった。

第三は磨消縄文系突起によって飾られる器種は単一ではないことだ。派生した近縁器種間に共有されたり、祖形は別でも様相が近くなった器種に転写されるように見受けられ、いわば器種を渡り歩いて変遷するように見受けられる。それが顕著なのは磨消縄文系突起第2段階～第3段階なのだが、それ以前からの器種構成の再編成期に相当しており、器種の系譜は錯綜していて、まだ様相が示せない。磨消縄文系突起はそうした系譜問題の解決に寄与してくれることが期待でき、異器種間の編年対比にも有効性が期待できる。

第四は磨消縄文系突起第3段階が蜆塚K 2 式と接点を持ちそうで、広域的な編年に一定の有効性が期待できそうなことだ。両者の対比は今後の課題で、突起だけでなく全体的に影響を与えあっている可能性もあり、重要な検討課題になろう。

成果は意外に大きくなったが、対象とした資料は貧弱で土器の全体像すらまだつかめないの、とんでもない誤謬を含んでいる可能性もある。さらなる資料集積と分析を自身に課し、搁筆する。

謝辞

未発表の実測図や再実測の図・拓本をたくさん使用させていただいた。飯田市教育委員会には報告書未刊行の中村中平遺跡出土土器(図11)の実測図公表をお許しいただいた。山梨県立博物館には金生遺跡21・36・37の、望月町教育委員会には浦谷B遺跡31・44～46・71の、更埴市教育委員会には石原A遺跡72～75の公表をお許しいただいたが、それらは報告漏れ資料や再実測である。実測とトレースは私が行ったが、中村中平遺跡は正式報告を準備中であり、金生遺跡4号住居一括土器と石原A遺跡一括土器は別途報告の用意ができています。また、該当する資料の実見などには、伊藤公明、櫛原功一、国島聡、倉沢正幸、小林公明、佐藤信之、佐野隆、新津健、野村忠司、馬場保之、樋口誠二、福島邦男、堀田雄二、三田村美彦、守矢昌文、山口明、山下泰永、綿田弘実の皆さんからご援助いただいた。ご芳名を記して感謝したい。

報告書から引用した実測図は1/6～1/8、拓本は1/4におおむね統一してある。

註

- 1 わたしは従来から「つ」の字文・直線文深鉢と呼称してきたが、高井東3式並行期より古い段階の完形品が浅鉢に限定されており、未だ深鉢は確認できない状態である。鉢もしくは浅鉢に限定されるのではないかとの指摘を、岡田憲一氏や鈴木徳雄氏などから受けており、そうした意見は軽視できないと考えざるをえない。また、「つ」の字文だけでなく、呼称に直線文を加えたのは、少数派として存在する直線文が高井東3式並行期に意味をもってくと推測していたからなのだが、中村中平遺跡出土土器の分析が進むうちに、少々違う事情らしいことがわかってきて考え直すに至った。本稿以降は、従来の「つ」の字文・直線文深鉢を、「つ」の字文鉢に変更するが、単に呼称が長すぎるという理由ではない。
- 2 二者の識別を重視した理由は前稿の論旨の中核の一つにあたり、簡単には説明しようがないので、前稿をご覧ください。
- 3 中部高地新段階は離山編年の羽状沈線文第1～第2段階に対応するとしたが、離山編年図には今となっては幾つも問題があり、大幅な改定が必要である。本稿とかかわる点に限って、次のように訂正する。39などを羽状沈線文第3段階におき、「つ」の字文鉢最古相に対応させるように配列してあるが、1段階新しくし過ぎており、羽状沈線文第1～第2段階に繰り上げる。
- 4 磨消縄文深鉢A・Bの系譜の末路が複雑なのは、羽状沈線文系土器を中核とした器種構成への再編成期に相当しているからだろう。体部モチーフが羽状沈線文に置き換えられる傾向が明瞭で、どこまで磨消縄文系とすべきなのかは、容易には決めきれない。伝統的な体部屈曲を失う傾向が強い中にもそれを継承する43などがあり、口縁部文様帯を継承しつつも屈曲を失う58などの発生などを見れば、器形変化も一筋縄では行かない。磨消縄文深鉢Bの系譜は当初からその屈曲が弛緩する傾向が強く、粗大化傾向も出るが、樽形あるいは砲弾形の器形に変化した磨消縄文深鉢Bは、かつて設定した楕円文深鉢との識別が難しくなる。そうした多様なタイプがそれぞれ系統的な変遷を保持するなら独立した器種とすべきだが、資料としては貧弱で実態は不明なことが多い。突起に論点を絞った本稿では、器種系譜の整理は宿題として残す。
- 5 こうした技法上の特徴が、上向き弧線文の変遷の中で一定の段階を示すのなら、ソロバン玉深鉢などの変遷観にも有力な指標を提供することになるが、磨消縄文系突起なりの消化の仕方ならば、普遍化や応用はできないことになる。

- 6 波状縁羽状沈線深鉢の波頂直下内面に点刻を加える例が散見されるが、72のような突起内面の点刻からの転用ではあるまいか。
- 7 向坂鋼二の設定による〔向坂1963、1970〕が、詳しい説明がなされていないので、わかりにくい点を残す。増子康真は向坂の設定を受けてこの型式名を使用する〔増子1994〕が、示された図を見る限り、両者の設定はほぼ一致するように思われる。

引用参考文献

- 安孫子昭二他1971「平尾No.9遺跡」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』南多摩郡平尾遺跡調査会
- 安孫子昭二 1981「関東・中部地方」『縄文土器大成3・後期』講談社
- 安孫子昭二他1994『田中下遺跡』宮田村遺跡調査会
- 市原壽文・住田誠行他 1979『中村遺跡』中津川市教育委員会
- 井深 智 1991『川原田B遺跡』山口村教育委員会
- 鵜飼幸雄・守矢昌文他 1990『棚畑』茅野市教育委員会
- 梅川勝史・国島聡他 2000『箆峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ』中郷村教育委員会
- 楠原功一 1987『姥神遺跡』大泉村教育委員会
- 久保田敦子 1997『八幡裏遺跡Ⅱ』上田市教育委員会
- 塩入秀敏・児玉卓文他 1979『深町』丸子町教育委員会
- 戸沢充則他 1965『井戸尻』中央公論美術出版
- 中川政信・小林真寿他 1979『下前沖遺跡』上田市教育委員会
- 新津健他 1989『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』山梨県教育委員会
- 花岡弘・綿田弘実他 1995『石神』小諸市教育委員会
- 馬場保之他 1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会
- 福島邦男 1984「浦谷B遺跡」『竹之城原・浄永坊・浦谷B遺跡』望月町教育委員会
- 藤沢宗平・山田瑞穂他 1972『離山遺跡』穂高町教育委員会
- 堀田雄二他 1986『不動坂遺跡群Ⅱ・古屋敷遺跡群Ⅱ』東部町教育委員会
- 増子康真 1994「加曾利B式に平行する東海地方の縄文後期土器」『古代人』55 名古屋考古学会
- 三田村美彦 1999「後期中葉（加曾利B式土器）」『山梨県史資料編2—原始・古代2』山梨県
- 宮沢公雄 1986『清水端遺跡』明野村教育委員会
- 向坂鋼二 1963「遠江における縄文土器の変遷」『遠江考古学研究』4 遠江考古学研究会
- 向坂鋼二・長田実 1970「静岡県の縄文文化」『静岡県の古代文化』静岡県教育委員会
- 百瀬新治 1981「大清水遺跡」『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』長野市教育委員会
- 百瀬長秀他 1981「判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その3』長野県教育委員会
- 百瀬長秀 1983「エリ穴遺跡」『長野県史考古資料編・主要遺跡・中信』長野県史刊行会
- 百瀬長秀他 1988「八窪遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬長秀 1996「羽状沈線文系土器群の様相」『第9回縄文セミナー記録集』縄文セミナーの会
- 百瀬長秀 1999「離山遺跡羽状沈線文土器の編年観」『長野県考古学会誌』90 長野県考古学会
- 百瀬長秀 2002予定「羽状沈線文系土器群初源期の地域相」『長野県の考古学2』長野県埋蔵文化財センター
- 山内清男 1964「文様帯系統論」『日本原始美術Ⅰ』講談社